

統合20周年記念 特別号

これからの富山大学を読む

## 富山大学へのご寄附のお願い

日頃より富山大学の教育・研究・社会貢献にご理解をいただき、また、格別のご支援賜りまして深く感謝申し上げます。富山大学のさらなる飛躍のために、富山大学基金を初め、特定基金（修学支援、研究等支援、課外活動支援、各学部基金）や附属病院等への募金へのご支援、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

### 大学全体を支援したい



#### 一般基金

留学支援や施設整備等、大学の活動を広く支援する基金です

### 特定の部局を支援したい



#### 医学部基金

教育施設の整備等、医学部の教育・研究に支援を行います



#### 工学部基金

創造工学センターをはじめとした、工学部の教育・研究に支援を行います



#### 経済学部基金

経済学部の教育・研究に支援を行います



#### 附属病院支援基金

高度な医療を提供するための教育・研究施設整備等を行う基金です



#### 芸術文化学部基金

芸術文化学部の教育・研究に支援を行います

### 学生を支援したい



#### 修学支援基金

被災した学生等、経済的理由により修学が困難な学生に支援を行います



#### 課外活動支援基金

学生の人間形成の場の一つである課外活動の支援を行います

### 研究を支援したい



#### 研究等支援基金

学生または不安定な雇用状態にある研究者の研究活動等に対し、支援を行います

### 特定の教員や学部・学科・講座等を支援したい



#### 寄附金制度（学術研究・産学連携本部）

教育研究の奨励を目的とする寄附金を受け入れる制度です

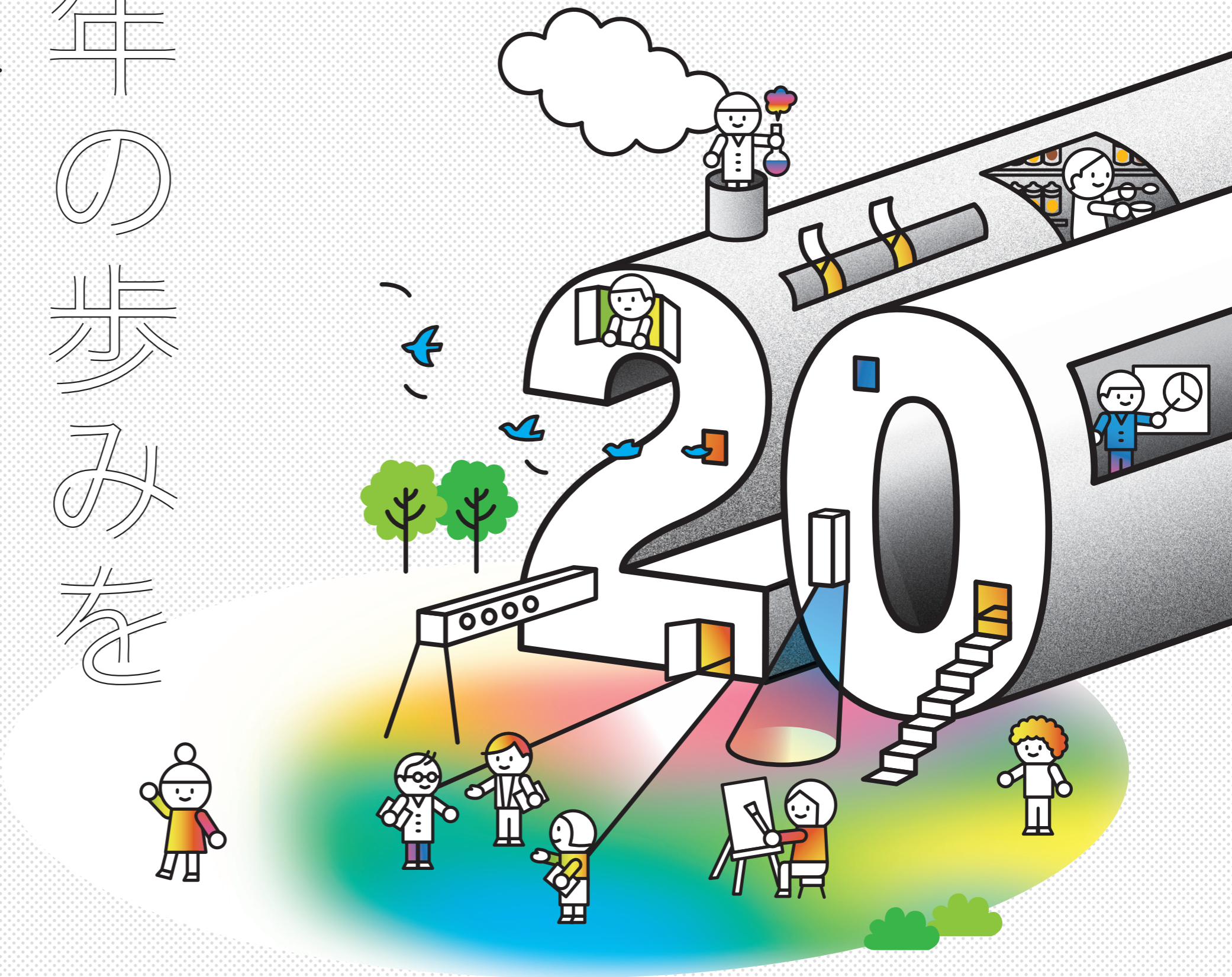
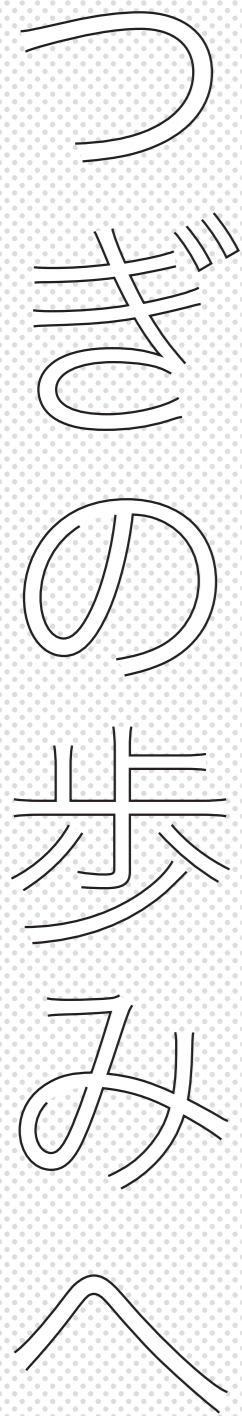
ご寄附のお申し込み、お問い合わせは富山大学広報・基金室にお願いいたします。  
〒930-8555 富山市五福3190 TEL 076-445-6178 FAX 076-445-6063  
E-mail:kikin@adm.u-toyama.ac.jp  
URL:<https://www.u-toyama.ac.jp/donation/>



# 20年 の 歩 み を

2005年、旧富山大学・富山医科薬科大学・高岡短期大学の三大学が統合し、  
総合国立大学「富山大学」として新たな歩みを始めてから20年。

異なる歴史や文化をもつ三つの学びの場が一つになり、  
教育・研究・医療・社会貢献・地域創生の各分野で着実な発展を遂げてきました。  
統合によって生まれた多様な学問領域の融合は、地域の課題解決や  
グローバルな研究ネットワークへと発展し、学生の学びにもつながっています。  
今、富山大学は「地域に根ざし、世界に開く大学」として、  
これまでの歩みを礎につぎの歩みへ、新たな挑戦を始めています。



## もくじ

### P3 The Special Interview

「これまでの歩みとこれからの展望について」  
富山大学学長 齋藤 滋

### P5 The Special symposium

「富山大学での学びはこれからの社会にどう生きるのか」  
パネリスト5名による座談会

### P12 The Amazing Talk

「重要無形文化財保持者認定について」  
芸術文化学部名誉教授 林 暁



知を合わせ、すばらしい未来を  
からつくる。

2025年10月1日、富山大学は統合20周年を迎えた。2005年に旧富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学の3国立大学が再編統合。長い月日をかけて改革を重ね、文系、理系、医薬系、芸術文化系の9学部を擁する総合大学へ発展した。しかし、その道のは全く平坦なものではなかった。今回、20年の軌跡をふりかえるとともに、グローバル化、人口減少社会の大学として次の20年をどう歩いていくか、齋藤滋学長に聞いた。

それぞれ歴史を持つ3大学が一つになることは、簡単ではありませんでした。

2005年、法人化した後すぐに3国立大学の統合という全国でも唯一の改革を私たちは成し遂げました。しかし、それまで異なる歴史や伝統を持つ3大学が一つになることは想像していた以上に大変なことでした。それぞれに理念、しきたりやルールがあり、名前は一つにならなかったのに中身はなかなか一つにならない。学問領域の融合という統合のメリットを出したいけれど、大学間の壁が邪魔をする。それでも何とか一つになると歴代学長を中心にものがき、改革を続けてきた20年間でした。

ようやく光が見えてきたのが、2018年の都市デザイン学部の新設の頃でした。材料から土木、都市交通、地球環境まで文理横断的に学べる総合大学としては画期的な学部で、サステナブル社会を先見した学びの環境を用意できました。旧学部で分断されていた教養教育を全学部の1年生が五福キャンパスで学べるようにしたのも大きなことでした。多様

な学生が学部の壁を超えて活発に意見を交換し合う、総合大学ならではの光景を見ると、これまでの苦労が報われた気持ちになります。

新しい時代の「選ばれる大学」として真に活躍できる人を育てる。

令和に入り少子化による大学間の競争が激化。選ばれる大学になるために大学院の大改革を行いました。学部の上に修士課程がある、いわゆる二階建ての蛸つぼ的な組織を文理融合系並びに医薬・理工融合系の二学環、三つの研究科に集約するといった改革を行いました。専門の異なる複数の研究指導員から指導が受けられ、一人ひとりの新たな気づきの機会を提供できるようにしました。大学院定員も20028年までに329名から498名と枠を増やします。企業も6年間しっかり学んだ即戦力を求めており、大学院修了者の就職率が100%まで向上しています。

「英語教育の推進」「データサイエンス教育の推進」「アクティブ・ラーニングの推進」を教育の3本柱としたのも特筆すべきことです。これからは海外市場をビジネスの主戦場にしないと日本は生き残れません。大学教育での英語力の底上げ、異文化理解は必須です。ビッグデータ社会でデータサイエンス・AIを駆使し、チームで課題解決に取り組む。新しい時代に真に活躍できる人材を育てていきたいと思っています。

大学と地域、知の団体戦で戦えば、もっとすばらしい富山になる。

18歳人口が減少する今、「学生数×教育の質」で大学の教育力を上げていくことが求められています。核となるのは「総合知」。個人戦ではなく団体戦で、いかに異分野、他者と協働して課題を解決できるかが鍵です。

人文学部なら、経済やデータサイエンスも学ぶ。医薬理工学環なら、数学専門の大学院生が健康診断のデータを解析し、医学部が気づかないような指摘をする。芸術文化学部なら、過去の作品の修復に工学を活かし、原材料を解析し、最新鋭の3D技術で新たな技術を駆使し、創作当時のままの作品を創出する。医療であれば患者、医師、看護師、薬剤師、事務、カウンセラーが議論し「患者がより良く生きる」という治療以上の価値を提供する。文理、医薬、芸術文化が融合する富山大学ならではの「知のミキシング」は、無二の武器になります。

学生みなさんにはワンチームで知を集め、これまで誰も解決できなかった問題を解決し、新しいものを生み出してほしいです。生成AIの進化は凄まじいけれど、今のところAIはゼロから1を生み出すことはできない。例えるならAIは医療ガイドラインで、最低限の医療は担保する。けれども、社会が求める価値を



つくり出し、未知の困難を解決へと導けるのは、経験や知識を持ち寄り協力しあえる人の力だけです。

富山大学は20歳、人というなら成人で親の手を離れたところ。未完成で、この先どんどん発展していく。次の10年、20年に僕はすごく期待しています。富山県は人口減少が進むけれど、新しい産業が生まれて魅力的なまちになれば外から人が来る。人々が豊かなくらしを営むことができれば、それは幸せなことです。富山大学で学んだみなさんが知を連携して、地域と世界のすばらしい未来をつくってほしいですね。

### 齋藤 滋

(さいとう・しげる)

富山大学長

1955年生まれ、大阪府出身。医学博士。奈良県立医科大学卒業。同大学院医学研究科修了。同大助教授をへて、98年富山医科薬科大医学部産婦人科教授。同大学附属病院周産母子センター長、同病院長などを歴任し、19年から現職。専門は産婦人科学。

# 富山大学での学びは これからの社会に どう活きるのか。

座談会パネリスト

小川 大輝さん

富山県生活力都市創造部  
交通政策課長兼交通係

渡辺 一海さん

富山県福祉保健部  
まちなか総合ケアセンター  
まちなか診療所 医師

織田 拳丞さん

株式会社 ModelingX  
前取締役

田中 七帆さん

都市デザイン学部材料  
デザイン学科2年

塚本 昌紀さん

地域観光マネジメント  
代表理事



「デジタル化が加速するいま、地域の課題を「データ」として捉える力が、仕事にも暮らしにも欠かせなくなっている。富山大学ではその土台となる学びをどう育て、社会へつないでいるのか。卒業生・在学生5人の言葉から、富山で働くことのリアルと、学びが現場に結びつく瞬間を聞いた。

**司会** はじめに、簡単に自己紹介をお願いします。

**塚本** 人文学部の文化人類学コースの出身で、現在は「地域・観光マネジメント」という会社を経営していて、北陸に観光のお客様を誘客する、いわゆる着地型観光の会社をやっています。

**小川** 芸術化学部の3期生として、デザイン情報系を中心に学んでいました。グラフィックだけでなく、デザインを幅広く勉強していました。卒業後は富山県役所に入りまして、デザイン職採用として行政の中で仕事をしています。観光やまちづくり系の部署も経験し、現在は交通部門で、交通政策課のバス交通を担当しています。

**織田** 工学部知能情報工学科を2019年に卒業しました。つい半年くらい前ま

で「ModelingX」という会社で3年間、取締役CTOをしていました。メタバース系のサービス開発をしていましたが、今はゲームプログラマーとして働いています。

**渡辺** 2015年に富山大学を卒業して、2025年に大学院を修了しました。現在は富山県まちなか総合ケアセンターの「まちなか診療所」で医師をしています。訪問診療や、医療・在宅介護の連携事業に関わっていて、加えて富山県の事業にも一部関わっています。

**田中** 現在、都市デザイン学部の材料デザイン工学科2年です。まだ研究室は決まっていなくて、今は基礎的な部分を広く勉強しています。勉強以外の活動だと、街なかには若者が少ないという富山市の現状があって、それを自分の中で課題として感じています。街なかのコンセプト型のシェアハウスがあるのですが、そこに入居して、地域の事業やイベントに参加したりしています。留学なども含めて、いろいろ挑戦しています。

**司会** 富山大学で得たもので、今の仕事や研究活動の中で「自分の武器になっている」と感じるものは何ですか？

**塚本** 私は、フィールドワークから得たものが今の自分に大きな影響を与えています。漁師さんや、地域で活躍している人たちの暮らしや「なりわい」に触れる中で、インタビューをしたり、漁師さんの家に泊めてもらったりもしました。正直、つらいこともありましたが、よそ

者として人の中に入っていき、難しさもありましたが、そういう経験の中で「人の中に入る力」とか、逆境とも言える状態から関係性をつくっていくマインドが身につきました。いまの仕事も、単なる観光ではなく、地域の人たちと深く付き合っていて、一緒に形にしていける必要があるのでは、ここは大きな武器になっています。

**小川** 私は、大学時代に「プロジェクトを組み立てる」という感覚を学んだことが武器になっています。行政の仕事は、決まったことをやるイメージが強いかもしれませんが、実際は関係者も多くて、前例が少ない中で組み立てていくことが多いです。

デザインを学んできたことで、目的や対象を整理して、見せ方や伝え方も含めて一つの形にしていける、そういう考え方が身につけていたのは大きいと思います。グラフィックや動画編集など、幅広く触れた経験もありますが、最終的には「どう設計して、どう伝えるか」が仕事で効いている感覚です。

**織田** 私は、大学で触れたプログラミングの基礎が、そのまま武器になっていると思います。もともと小さい頃からゲームが大好きで、大学3年生の時に趣味でゲーム開発ツールのアンリアルエンジン(Unreal Engine)に触っていました。アンリアルはC++で作られているので、C系言語に触れていた経験が、吸収のスピードに直結したと思います。

最初は趣味だったのですが、触っていき、うちに仕事につながって、今はゲーム開発者としてやっています。結果的に、大

学での基礎と趣味の熱量が重なった形です。

**渡辺** 医療なので、もちろん診療技術というのは武器としてあります。ただ、私が富山大学で得たものとして大きいのは「学び続けられる環境」だと思っています。医療は知見が日々更新されるので、卒業してからもつながりを残し、様々な学習機会をいただいています。

また、富山という土地ならではのネットワークも強みです。近くに気軽に相談できる人が多くて、そこからキャリアアップにつながる提案が出てきたりもします。

もう一つ、大学院で学んだデータサイエンス的な視点は現場でも活きていると感じます。最近は医療政策でもエビデンスが重視されていて「データを扱える人材が求められています」。

**田中** 私は在学中なので、今まさに、という感じなんですけど、先生や周りの方が「ここはこうした方がいいよ」と具体的に助言してくれるのがすごく助かっています。自分が今何をしたいか、将来どうしたいのか、まだ揺れている部分もあるんですが、相談できる環境があるのは大きいと思います。

## The Special symposium **マナ**

パネリスト5名による座談会



塚本 昌紀さん

フィールドワークで培った  
人の中に入り込む力が、  
今の自分をつくっている。

# 富山という土地で、最先端を相談できる場所になっていることが強み。



渡辺 一海さん

**司会** 外に触れてみて、改めて感じた「富山大学ならではの強み」や「富山という環境の個性」について聞かせてください。

**小川** 私は芸術文化学部だったので、当時はキャンパスの規模が大きいわけではなかったのですが、その分顔の見える関係性が作りやすかったと思います。廊下に出るとだいたい知っている人に会う、という距離感がありました。

地域の現場に触れる機会が多かったのも印象的です。例えば先輩から「御車山の車輪を替えるから手伝って！」と急に声がかかって、いきなり伝統の現場に入ることがあったり(笑)。そんな体験を通じて、地域の作家さんや事業者さんとの距離が近いというのは、富山ならではの事実感じました。

**渡辺** 私は東京の世田谷出身で、富山は縁もゆかりもなかったのですが、最初は暮らしが想像できなかったんです。来てみて感じたのは、街がコンパクトで移動が



しやすいということ。県内どこでも1時間くらいあれば行ける感覚があります。便利さはあるのに自然が豊かで、食事もお酒もおいしい。住んでみると受け入れてくれる文化もあって、昨年家を建て、永住しようと思いましたが。

大学も優しく受け入れてくれる印象があり、富山県の中で「困ったとき最先端を相談できる場所」になっていきます。アカデミックな視点で適切なアドバイスももらえる、という安心感があります。

**塚本** 私は大阪から来たので、最初はカルチャーショックを受けました。初年度が大雪で、「これは卒業したらすぐ帰ろう」と(笑)。

ただ外から来てみて強いなと思ったのは、本気で支えてくれる大人が多いということ。言葉だけで応援するのではなく、具体的に人を紹介してくれたり、動いてフォローしてくれたりする。そういう温かさは、富山の特徴だと思います。

**織田** 私の学科は、友達同士で教え合う文化が強かったです。プログラミングは難しいので、一人で抱えると詰みます。だから自然に助け合いが起きます。

課題も、学校の環境でやらないと進まないものが多かったため、放課後や土日も残って作業するのが当たり前になっていました。大変なこともありましたが、その「頑張る基準」が自然に上がったのは大きいと思います。

**田中** 私は初めて富山に来たのが受験の時、山と海が近いという印象が強かったです。入学式の後に自転車で帰った時に立山の景色がすごくきれいで、神通川

も見えて、自然が近いことを実感しました。方言も最初は不安でしたが、温かい雰囲気があって住みやすいです。総合大学なので他学部の人と関わる機会もあって、専門外の刺激も入ってくる。吸収できる場が多いのは強みだと感じます。

**司会** 今取り組んでいるお仕事や研究・プロジェクトと、富山大学がつながる可能性を感じる瞬間について伺います。

**塚本** 私の仕事は大学との親和性が高く、実際に観光庁の事業で、地域資源の調査を大学のゼミが担って、私たちは旅行商品として集客・セールスをするというようにチームとして一緒に取り組んだ実績もあります。

その時の人文学部の大西先生は、私が在学中にお世話になった方なので、プロジェクトの場で再会できたのは感慨深いものがありました。

また、県外から来た学生さんが地域を深掘りしたいと考えてアルバイトに来ることもあります。仕事として関わってほしい、地域との接点を作って、できればこの地に残ってくれたら理想だと思っています。

**小川** 交通の分野は、大学と行政の連携余地が大きいと感じています。富山は土木やコンサル系の企業も多いですし、取り組むべき課題も多い。大学側の研究と行政側の課題が噛み合えば、面白い動きが作れるはずですよ。

ただ交通に関しては、大学側のリソースも限られています。例えば、富山は土木やコンサル系の企業も多いですし、取り組むべき課題も多い。大学側の研究と行政側の課題が噛み合えば、面白い動きが作れるはずですよ。

すがまだ少ない印象もあって、そこはこれからだと思っています。都市デザイン学部ができたことで、向こう10年で「まちづくりを学んだ学生が、まちをつくる側に回る」流れが作れたら強いと思います。

**織田** ゲームそのものは大学と協業する場面が多いとは言えませんが、VR開発の面なら可能性があると思っています。VRはA-1の影響で下火になった領域もありますが、まだ成長している産業ですし、研究や地域課題解決に活用できる場面があります。技術提供という形でコラボできれば、面白いことができると思います。

**渡辺** 医療は、大学と現場(地域)のつながりが深い分野です。私があさひ総合病院で働いていた時に、学生の実習を3か月間受け入れる取り組みがありました。当時は、まだ始まったばかりの新しい仕組みでした。

地域が何を求めているのか、どういう課題があるのかは、実際に外に出てみると分かりません。地域に来た学生は、最初は技術に目が行きがちですが、2か月、3か月と関わるうちに、地域の人が何を考え、どこで困っているのか、そこにどう関わるべきかが見えてきていくようになります。

大学が、地域を深く学ぶ機会を設計できると、学生にも地域にも価値があると思います。

**田中** 私はデザイン思考を学ぶ授業があって、アイデアを出す時の考え方や、言葉にして形にしていくなかで学んでいます。それが街の活動につながっています。

去年、富山城址公園でイベントをやったのですが、能登半島地震の復旧工事があって、その工事が終わった後に何かできないかな、という発想がスタートでした。パークマネジメントの方と出会い、「一緒にやってみないか」という話になり、動き始めました。野外シネマ、気球の体験、盆踊りなどを企画して、想像以上にたくさんの方が来てくれました。「またやってほしい」という声もいただいて、今も次を考えています。

う感覚になりました(笑)。それは、景色や天気も含めて。

**小川** なるほど、大阪とのギャップですね(笑)。それまでは富山に来たことはあったんですか？

**塚本** 小さい頃に父に連れてきてもらって以来なので、無性に等しいくらいでした。最初は大学の寮に入って、今は新しくなってきたのですが、その頃はだいたいぶらぶら入っていて、お風呂も週4日とかしか沸かされないので、水のシャワーを浴びる日もありました(笑)。寮内で集会みたいなのもあった記憶がありますし、今とは全然違うと思います。

**渡辺** 私が入学した頃は、ちょうど昔の寮が取り壊されていた時でしたね。私は電車が好きで旅行で何度か富山に来たことはあったんですが、東京以外に住んだことがないので、最初、生活そのものが想像できなかったんです。「電車の本数が少

ないのに、どうやって生活してるんだろう」と正直思っていました。失礼なんですけど、本当に(笑)。

**田中** でも、逆に東京の子って、すごくたくましくないですか？ 小1くらいから電車を乗り継いで学校に行って、塾に通って、中学受験して…。

**渡辺** それはありますね。だから、こっちは来て思ったのは別の種類のたくましさでした。「中高生は自転車どこにでも行っているんだな」とか(笑)。あとは、方言がうれしかったんです。方言が聞き取れるようになると、地元に入れてもらえた気がして、「自分の田舎ができた」みたいな感覚がありました。

**小川** 環境が変わると、反動で動きたくなくなるというのがありますね。私と織田さんは富山出身で、田中さんは富山の印象は、「ザ・山」という感じだったということですが(笑)、みなさんは富山にどんな印象を持たれましたか？

**塚本** そうですね。速く来たな…、とい



小川 大輝さん

まちづくりを学んだ学生が、実際にまちづくりに関われる流れをつくれたらいい。

好きなことや  
夢中になれることが見つかり、  
人生の方向が動く。



織田 拳丞さん

**織田** 自分は、ゲーム開発やVRみたいな領域も、実践の学びとしてもっと扱っていいと思っています。ゲーム産業は成

私はサラリーマンを4年やって起業しましたが、最初は本当に分らなかったです。思いだけでは続かない。途中で折れてしまう人も出る。だから学生の時に、起業家の話を聞く機会や、実践の場がもっとあっていいと思います。

留学生のハングリーさも刺激になりました。大学の期間にそういうものに触れて、人として鍛えられる場が増えるといいと思います。

**小川** 産学官連携の制度自体は増えてきていると思います。ただ、分野によって進め方が全然違うので、一律の制度だけだと回り切らない部分があります。もう少し柔軟に、現場に出入りしやすくする仕組みがあってもいい。大学と行政が、課題を共有して動きやすい窓口や設計がある

**田中** そんな魅力があるのに、「若者たちが富山から出ていく」とよく言われますが、みなさんはどう考えていますか？

**塚本** 出ていきたい人もいるし、残りた人もいます。だから「出ていかないようにする」だけじゃなくて、残る人にとって魅力的な街である必要はあります。

ただ富山って、他の地域と比べて「戻ってくる」志向がまだ強い方だと思います。出たら出っぱなしで誰も帰ってこない地域もありますから。外で経験やノウハウやお金を持って、ある程度のタイミングで戻ってくる、というのも一つのあり方だと思います。

**渡辺** 医学部は特にですが、今「県内出身者を増やす」動きが強いんです。残る人が少ないから、という理由もあります。ただその一方で、県外から来て地域に目を向ける優秀な人材が入りづらくなる面もあり

ます。自分は県外から来て残った側なのでそこは難しいところです。

富山県は住みやすい平野が広くて、さらに発展できる余地があると思うんですよ。子育てや生活の安心感もありますし。だから「外から人材を集めて残す」取り組みも、大事になってくるかなと思います。

**塚本** やはり、若い人が「ここで働きたい」と思えるような、魅力的な企業があることは大前提だと思います。その中で、給与水準の話も避けては通れません。「地方だから、このくらいしか出せない」という考え方は、そろそろ限界に来ているのかなと感じています。もちろん首都圏とまったく同じ水準、というわけにはいかないと思いますが。

一方で、地方は固定費が大きく違います。家賃をはじめ、生活にかかるコストは明らかに抑えられる。そこを含めてトータルで考えたときに、「十分に豊かに暮らせる」という実感を持てるかどうかが大事だと思います。

先ほど織田さんもおっしゃっていましたが、働き方次第ではPCひとつで完結できるという環境も、整ってきていますよね？

**織田** 問題なくできていますね。必要な時にDiscordなどを使ってすぐにミーティングを開いていますし、自分の業界はまさにそれです。基本リモートで成立しやすい。今、東京と京都から仕事の依頼を受けているのですが、税金は富山に納めているというこの状況が嬉しく

長していて、日本は漫画・アニメの強みもある。しかも基本リモートで、地方でも仕事ができる業界です。地方の人材が都会の仕事を取れる可能性もあります。

専門学校ではやっているイメージがありますが、国立大学はそこに出ていない印象があるので、大学として触れる価値はあると思います。

**渡辺** 地域と関わる回路として、地域実習をより深いものにするのが重要だと思います。現場が何を求めているのか、地域にどんな課題があるのかは、しっかりと関わってみたいと分かります。

高齢人口増加に伴う疾病構造の変化、病院の経営難、医師偏在、地域包括ケア整備の地域間格差など、地域には複雑な課題があります。そこに対して、大学の専門性やデータ分析が入ると、学生の学びにも地域の改善にもつながる。現場と大学が、チームとして継続的に関われる仕組みができる強いと思います。

**田中** 大学にはキャリアサポートや留学制度などのバックアップがあります。でも「何かやりたい」と思った時に、気軽に相談できるメンター的な仕組みがもっとあるといいなと感じます。

相談窓口があっても、生活や手続きの相談になりがちで、「自分が何をやりたいのか」「どう形にするのか」を一緒に考えてくれる人につながりづらい。社会人や専門家と話す機会が増えると、挑戦のハードルが下がると思います。

**司会** 最後に、今の大学生や、これから富山大学で学びたいと考える若い世代に向けてメッセージをお願いします。

**塚本** とにかく行動量を増やした方がいいと思います。失敗してもいい。軌道修正していけばいい。頭で考えるより動いた方が早い時期があります。

それと、学生だからと言われて悔しい思いをすることもあります。私はフィールドワークで「どうせ学生の道楽だろ」と言われたことがありました。でも本気でやっている、必ず熱量は伝わる。そこは折れずにやってほしいです。

**小川** 授業以外の経験も、後で効いてくると思います。自分は学生の時に、大学の貸し出し用品を使ってスノーボード旅行を企画したことがあって、それが卒業後も続いて、後輩が引き継いでくれたこともありました。

企画して回す、という経験は、社会に出てからもそのまま使えます。あとで語れるものを、学生のうちに作っておくのは大事だと思います。

**織田** 興味があるなら、触ってみてほしいです。自分は大学3年の時に趣味でゲーム開発を触って、それが仕事につながりました。最初から職業にしようと思っていたわけではありません。

でも、好きなことや夢中になれることが見つかったら、人生の方向が動く。大学の間にそれを探してみたいし、少しでも気になるなら一回やってみたいと思います。

**渡辺** 自分の中では、「喜んで引き受ける」「絞る」「ロールモデルを探す」の三つ



田中 七帆さん



何かをやりたい時、  
メンター的な窓口があれば  
挑戦の幅はもっと広がる。

# どんな矜持をもつて どう生きるのか。

令和7年10月、国の重要無形文化財「髹漆」保持者に林曉名誉教授が認定された。髹漆とは、漆を塗ることを主とする漆芸の基本となる技法。鋭敏な造形感覚に基づく器形の表現と、精微な技巧が高く評価された。漆芸の第一人者として数々の功績を残し、本学でも長年にわたって後進の育成に尽力されてきた林名誉教授。先が見えにくい世の中で、工藝はどう進むべきか、人はどう生きるべきか。作品を通して未来を照らしてきた先生に話を聞いた。

## ものづくりの可能性を 一番感じたのが漆。

— 漆藝の中で最も古い技法といわれる「髹漆」との出会い、その魅力を教えてください。

髹漆は漆塗りの作業全般を指し、蒔絵や沈金、螺鈿といった絵や模様を施す仕事以外のすべての工程について表した言葉です。石膏原型を作って布を貼る乾漆技法など、漆を用いて器物の胎を作ることも含みます。今も産地によって生

地は生地、下地は下地、漆は漆と分業のところもありますが、私は設計から塗るまですべて自分で行います。

漆芸と出会ったのは東京藝術大学2年生の工芸実習です。数ある伝統工藝の中で、ものづくりの可能性を一番感じたのが漆でした。漆は布を貼り重ねて作ることもできるし、金属でも石でもガラスにも塗ることができ。最初にものを作る段階で材料を制約されない。陶器なら窯に入れて「後は神頼み」という要素もあるけれど、漆はそれがない。ものすごい完成度まで人間の手で持っていける

ところが好きですね。

— 重要無形文化財保持者として新たに認定されました。今の気持ちは？

正直言うと、うれしさと言っよりも違和感がありました。工芸技術の粋といわれるには私自身もっと高い域に行かなくてはいけないと思っています。大学で教えていると人の可能性をなるべく高い域まで引き上げたいと感じる。そう考えると「自分ももっともつとできるんじゃないか」と。

## 漆の表面はゆらゆらして 音楽のビブラートのよう。

— 制作で大切にしていることは。

いろいろありますが色上げが一つです。漆の表面の艶を上げて仕上げる技

術で、表面性を活かす作品の形づくりを目指しています。これは重要無形文化財保持者の増村益城先生の影響が大きい。先生の作品を初めて見た時、不遜を恐れずに言えば「これが自分の目指したいものだ」と思いました。

漆は塗ると約0.03mmの厚さになります。この0.03mmを破らないように表面を正確に研いで磨き上げると、艶が出て形が際立ってくる。アクリルの鏡面は完全な平面ですが、漆の表面はゆらゆらとした立体的で奥深い表情になる。音楽でいうならビブラートのようなもの。そのような漆の艶の持つ特性を活かして美しい表現を追求したいと思っています。

実は、漆は人にとつてとても扱いやすい素材なんです。ラッカー塗装のように急速に乾かないので望む厚さに塗れるし、非常に繊細な線も描きやすい。塗料として頑丈で長持ちするので2千年前の作品が今も残っています。

扱いやすい分、人の技量によって出来が左右されます。同時に人間は自分の思い描いた以上のものは作れないので、私自身いつも限界を感じています。漆でどこまで表現できるか。それがテーマです。

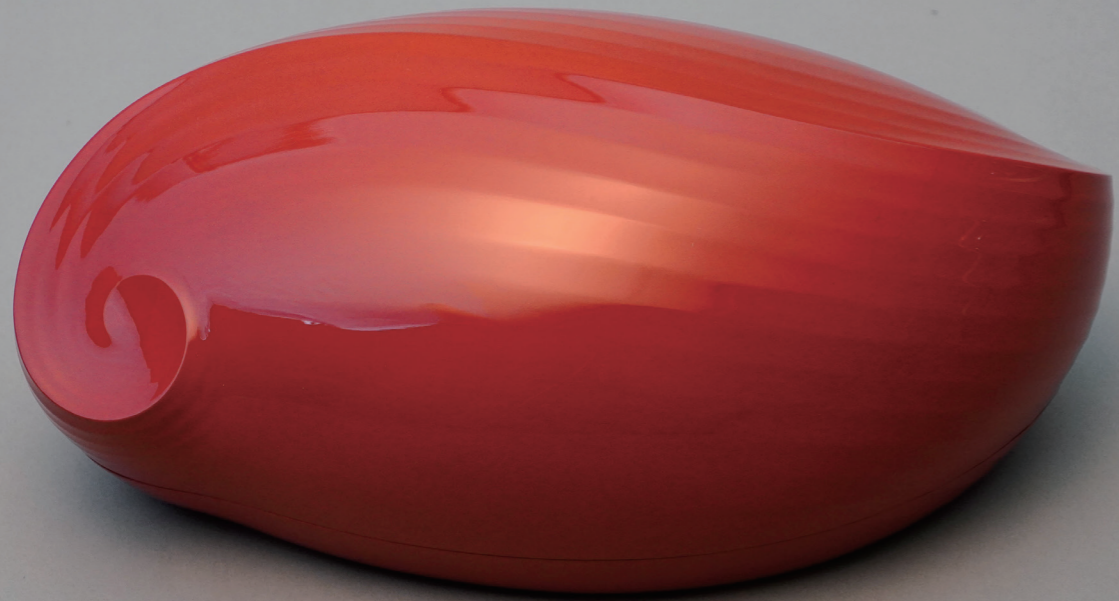




## 毎回新しいものを一つ入れると決めている。

―制作で壁にぶつかるとは？

伝統工藝というと、伝承された技術を焼き直して続けていく印象があるかもしれませんが、でも私の場合、自分がやってきたことの中に毎回必ず新しいものを一つ入れると決めています。それは技法や形、仕上げなどいろいろです。作品で満足したことはあまりなく、毎回壁にぶつかっています。今回の認定も壁で、どうやって



乾漆朱塗合子「螺」

乗り越えようかと考えています。でも基本的に楽家なのであまり悩んだりしません。そうじゃないとこの仕事はやっていけませんね(笑)。

私が40歳だった30年前まではまだ時代が良くて、「この仕事でも生きていけるかな」という感覚がありました。今は若い人がそう思えない時代。最近では日本の工藝が海外で高く評価され始めてきた一方、いわゆる「失われた30年」の中で、国内で作品自体の値段が大きく下がりました。コレクターやしっかり評価できる人が少なくなり、工藝や美術の道に進む人も減りました。

かつての武將は茶の湯を嗜み、茶器を眺めながら「次の社会がどうあるべきか」を考えていました。当時は茶器が一国と交換できるほどの価値を持つこともありました。残念なことに、日本の戦後教育は美術や芸術を二の次の科目として扱ってきた。それは正しかったのか。国力も経済力も心許ない今、問い直すべきだと思います。

## 人がどう生きていくのが、基準を示すのが藝術。

―伝統工藝はどうあるべきか。

藝術は、国の将来を見るための指針として存在すべきだと私は思います。どの国の都市に行っても美術館があるのはなぜか。もちろん「人生の喜び」や「癒し」と

いう面もあります。でも何より、人がつぎの時代をどう生きていくのか、基準を示すのが藝術。美しさは姿かたちだけではなく、技術や素材、社会の形やありよう、人の生き方にも表れます。Society 5.0を支えるプログラムだって美しくないとダメだと私は思います。

工藝は、明治の西洋化よりもずっと前から日本にある藝術で、日本人の美の基準でした。形や絵、技術、使い勝手、それがどう存在してきたかという歴史まで、一つひとつに美が宿っていました。それはファインアートのように単一じゃなく、複合的で、様々なありようを包含するシームレスな価値体系として、日本人の根幹に存在してきたもの。そんな生きる基準が時代を経るに従って後回しにされてきました。

次の時代の生き方を示すような作品をいつか自分も作れたらと思うけれど、これがなかなか難しい。見る人に自然と影響し、社会のありようにつながっていく。そういうものが作れたらいいですね。影響はたった一人に対してでもいいんです。世界を引っ張るトレンドになるくらいの勢いを工藝には取り戻してほしい。何より漆器は生活を彩る道具でもあるので、普段から使ってもらえると嬉しいですね。漆塗りのお碗だとお味噌汁が3倍美味しくなりますよ。

―統合20周年を迎えた富山大学に期待することは？

## どんな普通の人でもすごい可能性をもっている。

―学生にメッセージを。

今は若い学生が将来に希望の持てない漠然とした不安がある世の中ですよ。私が16、17歳の頃はミニスカートが流行りはじめると、社会全体になんとなく明るい希望が広がっていた。やりたいことに挑戦してもうまく行くと、失敗しても大丈夫だという空気があった。今は、道を

富山大学は国立大には珍しい芸術文化学部があります。時代はSTEM教育からSTEAM教育に変わり、AR・RTに注目が高まっています。サイエンスやテクノロジーが何のためにあるのか、その目的を示し、つなぐハブが藝術の役割。社会みんながその価値に気づきはじめています。

藝術を学ぶことで得る何より大きなものは、世の中を俯瞰する力です。美大受験でデッサンがありますが、あれはその人が目の前の世界を捉える力を持っているかを見るためです。俯瞰する力があれば、今パレスチナやウクライナで起こっている問題に対する自分なりの答えが見えてきます。世界の課題をどう自分で捉えるか。つまり生きる上での矜持をちゃんと持っているかが大事です。



乾漆蓮花食籠

一度踏み外すともう終わり。同調圧力が強く、勝手にやると怒られちゃう風潮がある気がします。

学生のみなさんに言いたいのは、若者が希望を持って生きていけるような社会を、あなたたち自身の手で作っていきましょうということ。時代を作っていく力が若いみなさんにはあるんです。4年間、とにかく好きなことを見つけて思いきりやってください。

大学で長く教えてきて思うのは、どんな普通の人でもすごい可能性を持っているということ。本来人間はもっと強くて丈夫な生き物です。大切なのは、親や教師、大人が子ども一人ひとりの可能性を信じる。信じれば、彼らは必ず伸びていきますから。

## 林 暁

(はやし さとる)  
富山大学名誉教授

昭和29年東京都生まれ。東京藝術大学美術学部工芸科及び同学大学院美術研究科修士課程で田口善次郎等から漆藝技法、市井では増村成雄から髹漆を学ぶ。技法を研鑽し、表現に独自の創意工夫を加えて研究を重ね、髹漆の技法を高度に体得。平成8年第43回展日本工芸会会長賞(優秀賞)、第56回展で文部科学大臣賞(優秀賞)受賞。平成22年紫綬褒章を受章。令和7年国の重要無形文化財「髹漆(きゅうしつ)」保持者に認定。95年より高岡短大、統合後の富山大学芸術文化学部で漆藝教育に携わり、後進の育成に努める。